産経新聞
平成24年(2012)日刊25103号
10|30[火]
発行所 ©産業経済新聞東京本社2012
〒100－8077東京都千代田区大手町1-7-2
☎東京(03)3231-7111(大代表)

「国境の島」学んで日本考える

東京の小学生 「われは海の子」プロジェクト

東京の小学生が日本の国境の島について学び、現地を取材してその成果を広く伝えることを目的としたプロジェクト「われは海の子」が今秋、スタートした。国境に近い島の暮らしぶりなどを学ぶことで、子供たちに「海から日本を考える視点」を持ってもらうのが狙い。島の関係者から具体的な話が聞けるとあって子供たちの関心も高い。取り組みをきっかけに全国各地で国境について考える機運の広がりが期待される。(平沢裕子、写真も)

海洋国家

プロジェクトは、「ウーマンズフォーラム魚(WFF)」(白石ユリ子代表)のメンバーらが今年発足させたNPO法人「海のくに・日本」が企画。WFFは、都市部に住む子供たちに海と魚を身近に感じてもらう活動を19年間続けている。今回のプロジェクトはその延長で、海洋国家としての日本の姿を子供たちに伝えることが目的だ。

9、10月には、都内4小学校の5年生を対象に、「日本の国境」について考える授業と、学校ごとにテーマの島(与那国島、沖ノ鳥島、対馬、北方領土のいずれか)について学ぶ授業が行われた。

大田区立相生小学校では、長崎県対馬市の財部能成市長が講師として登壇。財部市長は、対馬と韓国の距離は最短49・5キロで九州との距離132キロより近い▽韓国からの観光客は1日500人▽西暦663年の白村江の戦いから始まる朝鮮半島と対馬の関係―など対馬をめぐる過去から現在までの出来事を説明した。授業の中で財部市長は「日本を学ぶために周辺部の島々を学ぶことはすごく大切なことだと思う。周りの島々の国土があるから日本という国がある」と話した。

「われは海の子」の授業の様子。長崎県対馬市の財部能成市長は、対馬の歴史や特産品のアナゴについて説明した
＝東京都大田区立相生小

現地の取材も

相生小の場合、「社会」の特別授業として実施。外部から講師を招いての授業では食育や環境学習をテーマにしたものはあったが、地理的な話題は初めて。五十嵐則也校長は「島に暮らしている人から直接話が聞けるのは子供たちの理解を深めるのに役立つ。毎日のように国境をめぐるニュースが流れている今、子供たちに国境についてきちんと教え、考えさせる良い機会になった」。

4校で国境の授業を担当した中央学院大学法学部(地理学)の谷川尚哉准教授は「日本の国の形や姿を理解するうえで、国境にある島の暮らしを都会に住む子供たちに知ってもらうのは大事なこと。小5では習わない『排他的経済水域』という言葉を知っている子供もおり、授業をきっかけに領土や領海について興味を持ってもらえれば」と話す。

今後は子供たちの作文をもとに各校5、6人の代表を選抜。それぞれがテーマとするエリアに出掛け、島の暮らしや国境の海の現状を取材・報告してもらう。

事務局の佐藤安紀子さんは「国民の大多数が本土の都市部に暮らす今、海から日本を考える視点をほとんどの人が持っていないのが現状。将来を担う子供たちに、日本は海に囲まれた島国で、国境が海上にあることなどを理解してもらい、日本独自の魚食文化を守ることの大切さを伝えていきたい」と話している。